

平成三十年気良歌舞伎一座

いちのたにふたばぐんき
一谷嫩軍記

くまがいじんや
熊谷陣屋

熊谷次郎直実

熊谷妻相模

藤の方

源義経

白毫の弥陀六実八弥平兵衛宗清

梶原平次景高

堤軍次

四天王

男一 なんと皆の衆、見事に咲いたではないか。

男二 須磨の浦には二本とないこの桜。

男三 イヤ花も見事じゃが、この制札もまた見事じゃないか。

男四 コリヤ弁慶殿の筆じゃげな。

男一 したがワシには一字も読めぬわ。

男二 これはノウ。義経様がこの花を惜しみなされて、一枝切らば指一本切るべしとの御法度書じゃわいなあ。

男三 才花の代わりに指を切るとは、首切る下地か。才怖やの怖やの。

男四 こうしているうちも、虎の尾を踏む心地がするわ。

男一 指でも切られぬそのうちに、

男二 少しも早う。

男三 行きましようか。

四人 そうしましよう、そうしましよう。

〱奥に連れていく。

〱相模は障子押開き、日も早西に傾きしに、夫の帰りの遅さよと、待つ間程なく、

呼び 旦那のお帰り。

〱熊谷の次郎直実、花の盛りの敦盛を討って無常を悟りしか。流石に猛き武士も物の哀れを今ぞ知る。思いを胸に立帰る。

〱妻の相模を 尻目にかけて、座に直れば、軍次はやがて覆いになり。

軍次 先だつて平次影高殿、何か詮議の筋ありとて、御影の石屋を引き連れ御出であり奥の一間に、御休息にござりまする。

〱と委細を述べれば

熊谷 詮議とは何事やら。こりや軍次、その方は奥へまいり、梶原殿をもてなし申せ。

軍次 ハー。

熊谷 早く行け。

軍次 ハ・・・。

熊谷 早く行け、ハテさて何の猶予を行けと申すに。

軍次 ハー。

〽叱り散らされ是非なくも 相模に顔を見合わせて 心を残して入りにけり。

熊谷 ヤイ、ヤイ、ヤイおんな。国許出立のみぎり、陣中へは便りも無用と固く言いつけおいたるに、ことばを背くといいいあまつさえ、女の身で陣中へ来たること、不届き至極しごくの女め。

〽不興ていの体に相模はもじもじ。

相模 そのお叱りは存じながら。心にかかるは小次郎が初陣。一里行たら様子が知りようか、五里来たら便りもあらかと、七里あゆみ、十里あゆみ、百里あまりの道を、つい都まで……。ホホ、ホホ、ホホ……。のぼって聞けば一の谷とやらで、今合戦の最中と、とりどりの噂ゆえ、子に引かざるは親の因果、ご了見なされてくださりませ。シテ小次郎は息災でいますかえ。

〽問えば熊谷ことばを荒らげ、

熊谷 ヤア戦場へおもむくからは命は無きもの、堅固を尋ぬる未練な性根。もし小次郎直家が討ち死にしたらなんとする。

相模 そりやもう、小次郎が初陣に、良き大将と引つくんで討ち死にでもいたしたら、嬉しいことござりする。

「健気なことばに顔色直し。」

熊谷 まず小次郎が手柄といっぱ、平山の武者どころと争い、抜けがけの功名。軍門へ斬り入ったの働き。手傷、少々負うたれども、ナニ、末代まで家のほまれ。

相模 その手傷は急所ではござりませぬか。

熊谷 それ、それ、それ、まだ手傷を悔やむ顔つき。もし急所なら、悲しいか。

相模 何のまあ、かすり傷でも負うほどの働きは、でかしたと嬉しさのあまりお尋ね。その時お前も小次郎と一緒においでなされたか。

熊谷 オウサ、危うしと見るより、軍門に駆け入り、小次郎を無理に引き立て小脇にひん抱き、わが陣屋へ連れ帰る。また、それがしはその日の戦、からめての大將、無官の太夫、敦盛卿の首討って、イヤもう比類なき功名。

「話にさてはと驚く相模、後ろに聞きいる御台所、」

藤の局 我が子の仇、熊谷やらぬ。

熊谷 ナニ仇。

「熊谷やらぬと抜く所しっかとお押さえて、」

熊谷 仇呼ばわり、何奴。

へ引き寄するを女房押さえ、

相模 ア、もし、りようじなされな。あなたは、藤のお局さま。

熊谷 ナニ、藤の御方、アノ藤の御方。オオまことに藤の御方、思いがけなき。

へ御対面と、飛び退きうやまい奉る。

藤の局 ノウ熊谷、いかに戦のならいじやとて、年端もいかぬ若武者を、ようむごたらしゆう、首討ったな。
サア相模、約束じゃ、助太刀して夫を討たしや。

相模 サアそれは。

藤の局 最前さいぜん言いしは偽りか。

相模 そうではなけれど。

藤の局 そんなら討たしや。

二人 サア、サア、サア、サア。

藤の局 相模返事は、なな、何と。

へ刀追っ取りせり付き給えば。

相模 アイ。

「アイと返事も胸に迫りながら、

相模 コレ、直実殿。敦盛さまは院のお胤たねと知りながら、どう心得て討たんしゃんした。様子があるう、その訳を。

「云うも切なき

相模 モシ。

「うろろうる涙、

熊谷 愚か、愚か。この度の戦い、敵と目指すは平家の一門。敦盛卿はさておき、しのぎをけずるに、誰彼の容赦がなろうか。イヤ何、藤の御方、戦場の儀は是非なしと御諦おんあきらめくださるべし。それがし、その日の戦のあらましと、敦盛卿を討つた次第、ササ・・・、お物語つかまつらん。まず、まず・・・。

「物語らんと座を構え、

熊谷 さてもさんぬる六日の夜、ハヤ東雲しのめと明くる頃。一二を争い抜けがけの、平山、熊谷討つとれよと、きつて出でたる平家の軍勢。や、中に一際。

「すぐれし緋緘ひかじし。さしもの平山あしらいかね浜辺をさして、

熊谷 ハハ逃げ出す。ハテ、健気なる若武者や、逃ぐる敵にな目な掛けそ、熊谷これに控えたり、返させ給え。
オーイ、オーイ、オオーイ。

〱扇を持って打ち招けば、駒の頭を立て直し、波の打物ニ打ち三打ち、

熊谷 イデヤ組まんの御仰せ、げに最もと太刀投げ捨て、

〱馬上ながらもむんずと組み、両馬が合にどうと落つ

藤の局 すりや、その若武者を組み敷いてか。

熊谷 されば御顔よく見たてまつれば、髪黒々と細眉に、年はいざよう我が子の年ばい。定めて二親まします。
んと、子を持ったる身の思いのあまり、上帯取って引つ立て。

〱ちり打ちはらい、

熊谷 早落ち給え

相模 と進めさしやんしたか、そんなら討ち奉るお心ではなかつたのう。

熊谷 オウサ早落ち給えと進むれど。一旦敵に組み敷かれ、何面目に永らえん、はや首討て、熊谷。

藤の局 ナニ、首討てといいやつたか。健気なことを言つたのう。

熊谷 サ・・・その仰せにいとどなお、涙は胸にせきあげ。まっこの如くせがれ小次郎、敵に組まれて命や捨てん、あさましきは武士の習いと、太刀も。

〴〵抜きかねしに、逃げ去ったる平山がうしろの山より声高く。

熊谷 熊谷こそ敦盛を組み敷きながら助くるは、二心きわまつたりと。

〴〵呼ばれる声々、

熊谷 是非もなや。仰せおかるる事あらば、云い伝え参らせんと申し上ぐれば。

〴〵御涙を浮かべ給い、

熊谷 父は波濤へおもむき給い、心に掛かるは母人の御事、昨日に変わる雲井の空、定めなき世の中を如何過ぎゆき給うらん。未来の迷いこれひとつ、熊谷頼むの御一言、是非に及ばず御首。う・・・ち・・・うち奉ってござりまする。

二人 ハハア・・・。

熊谷 戦場の習いだえい。

〴〵話すうちより藤の局。

藤の局 さほど母を思うなら、経盛殿のことばにつき、なぜ都へは身を隠さず。

「一の谷へは向いしぞ、健気によろうたその時は、

藤の局 母もともども悦んで。

「進めてやりしが可愛いやな。覚悟の上も今さらに胸もせまりて悲しやと、くどき嘆かせ給うにぞ。ごもつともとは思えども、相模はわざと声はげまし、

相模 いや申しお局さま。御一門残らず八島の浦へ落ち行きたもう中に一人いちにんふみとどまり、討ち死になされた敦盛さま、数万騎すまんきに優る功名まさ、ただし落ちのび御身を隠し、人のそしりを受け給うがお前の身ではお嬉しいか。すりや、ご卑怯な、ご未練でござりまする。

「いさめに熊谷、

熊谷 でかした、でかいした。こりや女房、藤の御方、この所にござあつてはお為にならず。へんしも早ういずかたへなりともお供もうせ。イヤ何、藤の御方、戦場の儀は是非なしと御あきらめくださるべし。

我はこれより、敦盛卿の御首おんしるし、義経公の実検にそなえん。ヤアヤア軍次はおらぬか。軍次、軍次。

「呼ばわる声ともろともに一間へこそは入間の、

「鐘は無常の時を打つ。陣屋陣屋のともしびに、いとど悲しき藤の方、

藤の方 思い出だせば不憫やな。今わの際までも肌身はなさず持ったるは、この青葉の笛。我と我が身の石塔を、建ててもろうたあたいにと、渡しおいたるこの笛の、わが手に入りしも親子の縁。

〱 魂魄この世にあるならば、なぜ母にはまみえぬぞ、

藤の方 聞こえぬ我が子や、なつかしのこの笛や。

〱 肌につけ身に添えて、尽きせぬ想いぞやるせなき。

相 模 イヤ申しお局様。その笛が良いお形見。きょうだらに 経陀羅尼より笛の音を、お手向けあるが直ぐに追善、敦盛様のお声をば聞くと申うてあそばせや。

〱 勧めにしたがい藤の方、涙にしめす歌口も、

〱 親子の縁の絆にや、障子にうつる陽炎の、姿はたしかに敦盛卿、藤の局は一目見るより。

藤の方 ヤ我が子か、なつかしや。

〱 駆け寄り給うを、相模は引き留め、

相 模 香の煙に姿をあらわし、実方は死して再び都へ戻りしも、一念のなすところ。いぶかしき障子の影、こ
とに親子は一世と申さば、ご対面遊ばさば御姿は消え失せん。

藤の方 イヤのう相模。四十九日その間、魂魄宙有に迷うと聞く。せめては逢うて一言を。

〱 振り放し振り放し、障子がらりとあけ給えば、姿は見えず緋緘の、鎧ばかりぞ残りける。

藤の方 さては鎧の影なりしか。

相模 恋しと思う心から、お姿とみえたるか。

藤の方 相模。

相模 お局様。

へともにこがれて正体も、泣きくどくこそ哀れなり。

へ時刻移ると次郎直実、首桶たずさえ立ち出ずれば、相模は夫のたもとを控え、

相模 直実どの。これが親子一生の別れ、せめて御首になりともお暇ごいを。

へ藤の局も涙ながら、

藤の局 ノウ熊谷、そちも子のある身でないか。野山に猛きけものさえ、子を悲しまぬはなきものを。情けに一目見せてたべ。

へすがり嘆かせ給えども、

熊谷 実検に供えぬうちは、ご内見はかないませぬ。

へはねのけ突きのけ行く所へ、

義 経 ヤアヤア熊谷、敦盛が首持参に及ばず。義経これにて見ようずる。

「一間をさっと押し開き立ち出で給う御大将。はっと次郎直実、思いよらねば女房も藤の局も諸ともに、あきれながらも平伏す。義経席に着き給い。」

義 経 いかに直実。首実検延引といい、戦なかばに暇を願う汝が心底いぶかしく、ひそかに来たって最前より、始終の様子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首、実検せん。

熊 谷 ハー。

「仰せを聞くより熊谷は、はっと答えて立ち上がり、若木の桜に立て置きし制札引き抜き、

「恐れ気もなく義経の御前に差し置き、

熊 谷 さいつ頃、堀川の御所において六弥太には、忠度の陣へ向かえと花に短冊。また、この熊谷には、敦盛卿の御首打てよと、弁慶執筆の此の制札。すなわち札の面の如く、ご諚にまかせ敦盛卿の御首打ったり。イザご実検くださるべし。」

「ふたを取れば、

相 模 ヤアその首は。」

「かけ寄る女房引きのけては、御台は我が子と心も空、立ち寄り給えば首を覆い、

熊 谷 実検に供えし後は、お目にかくる此の首。ササお騒ぎあるな、エエイ騒ぐな、お騒ぎあるな、騒ぐな……

お騒ぎあるな。

〴と熊谷が、いさめに流石はしたのう、寄るに寄られぬ悲しさの、千々に砕くる物思い。次郎直実謹んで、

熊谷 敦盛卿は院の御胤、この花江南の所無なり一枝折盗の輩ともがらにおいては天永紅葉の例にならい、一枝を伐らば、一指を切るべし、花によそえし制札の面、察し申して討つたる御首、御賢慮に叶いしか、但し直実あやまりしか、御批判いかに。

〴と言上す。義経きん然と実検ましまし。

義経 花を惜しむ義経が、心を察しよくぞ討つたり。敦盛が首に相違ない。由縁の者もあるべし。見せて名残りを惜しませよ。

熊谷 ハー。

〴仰せを聞くより、

熊谷 コリヤ女房。敦盛卿の御首おんしるし、藤の方へお目にかけてよ。

相模 ア・・・アイ。

〴あいとばかりに女房は、あえなき首を手に取り上げ、見るも涙にふさがりて、変わるわが子の死に顔に、胸はせきあげ身もふるわれ、持ったる首のゆるぐのを、うなづくように思われて

相模 門出の時に振り返り、にっと笑うた面差しがあると思えば。

〴可愛さ、

相模 不憫さ。

〴声さえのどに詰まらせて、

相模 もうしもうし藤のお局さま、お嘆きあつた敦盛さまの此のお首。

藤の局 ヤ、その首は。

相模 サイナア、もし。此のお首はな、私がお館で熊谷殿と忍び合い、身持ちながら東へくだり、産み落とし
たはな、コレ此の敦盛さま。その時あなたもご懐胎、誕生ありしその御子が、無官の太夫さま。両方な
がらお腹に持ち、国をへだてて。

〴十六年、音信いんしん不通の主従がお役に立ったも因縁かや。

相模 せめて最後はいさぎよう。

〴死になされたかとうらめしげに、問えど夫はまたたきも、せん方涙御前を恐れ、余所に言いなす詞さえ、泣く
音血を吐く、

相模 もし。

熊谷 コレ。

〴〵思いなり。

〴〵折から風に誘われて法螺貝の音聞こゆれば、義経は勇み立ち、

義経 ヤアヤア熊谷、ちやくとう着到知らせのほら法螺の音、ほら急ぎ出陣の用意用意。

熊谷 ハハア。

〴〵仰せに直実かしこまり、急ぎ一間へ入りにける。

〴〵最前より様子聞き入る梶原平次、小柴垣より踊り出で、

梶原 聞いた聞いた、かくあらんと存ぜし故、石屋めの詮議に事よせ伺うところ、義経、熊谷心を合わせ、敦盛を助けし段々、このこと鎌倉へ注進する。ウン、待っておれ。

〴〵言い捨て駆け出す後より、はっしと打ったる手裏剣は骨を貫く鋼鉄の石つぶて、

弥陀六 エイ。

梶原 グアア。

〴〵ウンとばかりに息絶ゆる。

「すわ何者と云ううちに立ち出る石屋の親爺。」

弥陀六 お前がたの邪魔になる石ごっばを、捨ててあげました。サテ幽霊のご講釈、承ってまずは安堵、もう御用もござりませねば、これでお暇いたします。

「と立ちゆくを、」

四天王 親爺待て。

弥陀六 なんぞ、御用にござりまするか。

四天王 おもてをあげい。

弥陀六 ヘイ。

四天王 そちが名は。

弥陀六 私めは、この御影みかげの里に年久しゆう住まいまする白毫びやくごうの弥陀六という親爺おやめにござりまする。

四天王 用はない、行け、行け。

弥陀六 ハイ、ありがとうございます。

義経 宗清待て。

イヤサ弥平やへいびやうえ兵衛宗清待て。

「ことばにびっくり、はっと思えどそらさぬ顔、

弥陀六 モシ弥平さんとやら、大将さまが呼んでござるぞ。モシ弥平さん、弥平さん、そんな御方は居てじゃござりません。

義 経 まことや。ことわざにも、至って憎いと悲しいと嬉しいとのこの三つは、人間一生忘れずとかや。その昔、母常盤のふところに抱かれ、伏見の里にて雪に凍えしを、汝が情けにて親子四人、助かりしその嬉しさ。その時我三才なりしも、面影は目先に残り、見覚えのある眉間のほくろ

弥陀六 ヤ。

義 経 サ隠しても隠されまい。重盛卒去のその後は行方知れずと聞きつるが、さては、御影の里に身を潜め、堅固であったか、じいよ。満足、満足。

「聞くより弥陀六、つかつかと立ち寄り、義経の顔穴の開くほど打ち眺め、

弥陀六 ハテ恐ろしき眼力じゃよなあ。老子は生まれながらにさとく、莊子は三つにして人相を知ると聞きしが、かく弥平兵衛宗清と知られしからは、いかに義経殿、その時こなたを見逃さずば、今、平家の立てこもる鉄拐が峰、ひよどり越えを攻め落とす大将はよもあるまい。また池殿と云い合せ、頼朝を助けずば、平家は今に栄えんもの。此の宗清が一生の不覚。それにつけても小松殿ご臨終の折から、我を召され平家の運命末危うし、汝ひそかに武門を逃れ身を隠し、一門の跡弔えと、唐土育王山へ祠堂金と偽り、三千両の黄金と、忘れ形見の姫君一人お預かり奉り、此の御影の里に身しりぞき、先立ち給う御一門の石

碑、播州一國那智高野、近國他國に建て置きし、施主の知れぬ石塔は、皆此の弥平兵衛宗清が、涙の種とご存知、知らずや。今度敦盛の石塔あつらえしに見えし時も、ご幼少にてお別れ申せし故、御かんばせはもしかとは見覚えねど、まさしく平家の御公達ならんと、快くうけ合いしが、さては命に代わる小次郎が、菩提のためであつたるか、いかに天命帰すればとて、我が助けし頼朝、義経、この兩人の軍配にて、さしも榮えし平家の一門、一時に滅ぶるとは。

〽是非もなき運命やな。

弥陀六 平家のためには、獅子身中の虫とは我が事、さぞや先立ち給う陪臣ばいしんの魂魄こんぱく、我を恨みん、あさましや。

〽或いは悔やみ、或いは怒り、涙は滝をあらそえり。もとよりさとき大将義経。

義経 ヤアヤア熊谷、申しつけたる品、これへ持て。

熊谷 ハー。

〽はつと答えて次郎直実、家来に持たせし鎧びつ、御目通りに直し置く。

義経 コリヤ親爺、其の方が大切に育てる娘へ、この鎧びつ届けてくれよ、コリヤ弥陀六。

弥陀六 ナニ、弥陀六とは。宗清なれば平家の余類、源氏の大將が頼むべきいわれなし。コリヤ面白い、いかにも弥陀六、頼まれてしんぜましょう。したが娘には不相応な下されもの。中は何でござりましょう、ちよつとあらためてみましようか。

〽ふた押し開くれば敦盛卿。

藤の局 ヤヤ、そなたは。

弥陀六 イヤ、この中には何にもない、この中には何にもない。これでちよつとは虫が治まった。イヤ何、直実殿。こなたへの御返礼はこの制札、一枝を伐らば一指を切つてかたじけない。

〴〵心をくんで御大将。

義 経 いかにも直実。西国出陣の時移る、用意はいかに。

熊 谷 先だつて願ひあげし暇の一件、かくの通り。

〴〵切り払うたるもとどりに、義経も感心あり

義 経 さもありなん。それ武士の功名ほまれを望むも、子孫に伝えん家の面目。その伝うべき子を先立て、戦に立たん望みは、ホウもつとも。願ひにまかせ暇を得さず、汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常盤の回向も頼む。

熊 谷 ハハア。

〴〵と親しき御諛ごじゆ、はつとばかりに直実は上帯をひっぱどき、相模見るより。

相 模 ヤヤ、その御姿は。

熊 谷 ハテ何おどろく事があるうや、御大将のお情けにて、戦なかばに御暇おんいとまを賜りし身の本懐。熊谷が向か

うは西方さいほう弥陀の国、倅せがれ小次郎が抜け駆けしたる九品蓮台、一つ蓮すの縁を結び今より我が名を蓮生と改めん。一念弥陀仏即滅無量罪、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏よな。

〽哀れにもまた殊勝なり。

弥陀六 長居は無益。むやく

〽と弥陀六が鎧びつに連尺れんじゃくを掛けた思案の締めくくり。

弥陀六 コレ、コレ、コレコレコレ、義経殿。

もしまた敦盛よみがえり、平家の残党かり集め、恩を仇にて返さばいかに。

義経 フン、フン、フハハハ、その時こそは義経や、兄頼朝が助かりて、仇あだをむくいしその如く、天運次第に恨みをうけん。

熊谷 げにその時は此の熊谷、浮世を捨てて不随者みずいしやと、源平両家に由縁ゆかりはなし、互いに争う修羅道の、苦験を助くる。

〽回向えこうの役。

弥陀六 此の弥陀六も時をえて、また宗清と心の還俗げんぞく。

熊谷 我は心も墨染めに、黒谷の法然を師と頼み教えを受けん。君にも益々御安泰。

〽お暇申す、と夫婦連れ、石屋は藤のお局を、伴い出る陣屋の軒。

相模・藤の局 御縁もあらば。

〽と女子同士、

熊谷・弥陀六 命があらば。

〽と男同士。

義経 堅固で暮らせよ

〽御上意に有難涙、名残の涙、また思い出す小次郎が首を手ずから御大将。

義経 この須磨寺に取り納め、末世末代敦盛と、その名は朽ちぬ黄金札。こがねざね

弥陀六 武蔵坊が制札も。

藤の局 花を惜しめど花よりも。

相模 惜しむ子を捨て。

軍次 武士を捨て。

熊谷 住み所さえ定めなき。

義経 有為ういてんべん轉變の。

皆 世の中じゃなあ。

〽声も涙にかき曇り、

義経 こりや。

熊谷 今は早、何思うことなかりけり。弥陀の御国へ行く身なりせば、十六年は一昔。夢だ、夢だ。

〽ほろりとこぼす涙の露、ひいらぎにおく初雪の、日陰に融ける風情なり。